

ガザリーの修行論における性の問題

—— 神秘主義的宇宙論との関係を中心に ——

青柳 かおる

〈論文要旨〉 本稿では、ガザリーの神秘思想における性の重要性を検証し、特に神秘主義的宇宙論と性の議論との結びつきを明らかにする。ガザリーの禁欲主義の議論にも触れながら、食欲と性欲を比較し、さらにマツキーとイブン・アラビーの議論とも比較して、スーフィズムの思想史におけるガザリーの性の議論の独自性を検討する。まずマツキーの神秘主義的宇宙論は断片的であり、また禁欲的に性欲を抑えていく立場である。ガザリーは、マツキーの宇宙論を体系化し、宇宙論において人間靈魂の上昇を説き、さらに性の持つ肯定的な力を認めた。そして性に対する考え方と神秘主義的宇宙論が一体となった結果、性欲は、神秘修行を中心とする神への崇拜に励む原動力になる、という思想を理論化することができた。存在一性論を説くイブン・アラビーにおいては、神と世界の一体性と重なる男女の性的結合が重視されている。ガザリーは、性の肯定的な力を取り入れ、自らの神秘主義的宇宙論に適合する形の修行論を展開しているのである。

〈キーワード〉 ガザリー、スーフィズム、性、修行論、宇宙論

一 はじめに

本稿では、ガザリー (Abū Ḥamid al-Ghazālī, d. 1111) の神秘思想における性の重要性を検証し、特に神秘主義的宇宙論と性の議論との結びつきを明らかにする。ガザリーの代表作『宗教諸学の再興 (*Ihya' 'Ulum al-Din*)』では、来世での見神 (*ru'yah Allah*) を目指すスーフィーのための倫理や日常生活の送り方が論じられてい

るが、この書の第二二番目の書「婚姻作法の書 (*Kitāb Adāb al-Nikāḥ*)」において、ガザリーは、婚姻生活におけるセクシュアリティの問題に大きな関心を持っており、性交の作法、避妊、性欲など性に関する様々な事柄を説明している。⁽¹⁾ またガザリーは、第二三番目の書「二つの欲望の撲滅の書 (*Kitāb Kasr al-Shahwatayn*)」においても性の問題について論じている。二つの欲望とは食欲 (*shahwah al-baṭn*; *shahwah al-ma'idah*) と性欲 (*shahwah al-farj*; *shahwah al-wiqā'*) のことで、食欲に関する問題も扱われている。ガザリーはこの二つを欲望の中でも根源的で重要なものと考えているのである。

しかし、ガザリーの神秘思想における性の問題を分析した研究はあまりない。性欲を含む人間の欲望全体を克服していく禁欲主義や、修行論の中で論じられてはいるが、⁽³⁾ 性欲を抑える方向に関心が向けられており、神秘主義における性の意義については明らかにされていないのである。スーフィズムとセクシュアリティの研究は、ガザリーよりもむしろイブン・アラビー (*Ibn al-'Arabi*, d. 1240) の研究が中心であり、存在一性論 (*wahdah al-wujūd*) における女性観、性愛観が論じられることが多い。⁽⁴⁾ 筆者は「婚姻作法の書」の分析を行ったので、⁽⁵⁾ それを踏まえ、「二つの欲望の撲滅の書」を中心に、ガザリーの神秘思想における性の役割を論じたい。その際、ガザリーの禁欲主義の議論にも触れながら、食欲と性欲を比較する。さらに、ガザリーに大きな影響を及ぼしたスーフィー、マッキー (*Abu Talib al-Makki*, d. 998) と、⁽⁶⁾ ガザリーとは傾向の異なる神秘思想家であるイブン・アラビーの議論とも比較して、スーフィズムの思想史におけるガザリーの性の議論の独自性を明らかにする。

二 ガザリーの神秘主義的宇宙論

まず、ガザリーの神秘主義的宇宙論について概観したい。ガザリーの議論の背景には、彼の宇宙論があると考えられるからである。現象界の背後にいくつかの世界の階層があるという世界観は、初期のスーフィーたちによって紹介され、後のスーフィーたちによって発展した。⁽⁷⁾ スーフィーの世界観は、ムルク界 (*alam al-mulk* 王権の世界)、マラクト界 (*alam al-malakut* 主権の世界)、ジャバルト界 (*alam al-jabarut* 権力の世界) という分類によって説明される。⁽⁸⁾ ムルク、マラクト、ジャバルトという言葉で最初に世界を表現したのは、マツキーである。マツキーの『心の糧 (*Qut al-Qulub*)』の記述によれば、肉眼で見られるムルク界と、心眼で見られるマラクト界があり、さらにジャバルト界が最上位にある。⁽⁹⁾ こうして宇宙は三つに分けられるが、マツキーにおいて宇宙論の議論は断片的でしかなかった。⁽¹⁰⁾

ガザリーは、マツキーの宇宙論を発展させた。世界をムルク界 (現象界) と、マラクト界 (不可視界) の二つに分け、⁽¹¹⁾ ムルク界とマラクト界の対応関係と神秘主義的な靈魂上昇を論じているのである。ガザリーによれば、マラクト界とは天使と靈的存在の世界であり、⁽¹²⁾ 光のような高貴な、高位の実体であり、天使によって表わされる靈的なものの世界である。⁽¹³⁾ それと対照的に、現象界は物質的で影のような世界である。⁽¹⁴⁾

このように二つの世界の関係は、正反対であり、次元を異にする。しかし二つの世界の間にはつながり (*ittisal*)、相関関係 (*munasabah*) があり、現象界はマラクト界の象徴 (*mithal*) なのである。⁽¹⁵⁾ そしてその関係によって、人間は神に近づくことができる。もし、両者の間につながりがなければ、不可視界への靈魂の上昇の

方法 (tarīq al-tarāqī) は妨げられ、神的なものの現前への旅、神への近接 (qurb) も不可能になる。⁽¹⁶⁾ 人間の上昇の究極地点は、一性の王国 (al-mamlakah al-fardaniyah)、つまりファナー (fanā' 神との合一) であり、その段階ではもはや上昇はなく、多性が排除され、唯一性が確立される。⁽¹⁷⁾ 唯一性が確立されたファナーの状態では、人間の真知 (ma'rifah) は神的現前に向かい、「神しか知らない、神しか見えない」と言うことができる。⁽¹⁸⁾ ガザリーは、天国の恩恵は神への愛の程度により、神への愛は、神に関する真知の程度によるとする。⁽¹⁹⁾ 従って、現世における神との合一体験の中で神を見る (知る) ことが多いほど、来世での見神 (神の完全な開示) が容易になる。

ガザリーの神秘主義的宇宙論をまとめると、以下のようになる。①二つの世界は正反対であるが、対応関係がある。②神秘修行によって、人間靈魂は二つの世界を上昇し、神と合一できる。③神との合一体験において現世で神を見る体験が、来世での見神につながる。⁽²⁰⁾ 次に、ガザリーは欲望を抑えることの重要性を説きながら、特に性欲に積極的な意義を見出していることについて、食欲と性欲を比較しながら論じたい。そしてガザリーの神秘主義的宇宙論と性の議論との関係を明らかにする。

三 ガザリーにおける禁欲主義

「二つの欲望の撲滅の書」で食欲と性欲を取り上げているように、ガザリーはこの二つの欲望を抑制することが重要であると考えている。ここでは、二つの欲望を抑えたガザリーの禁欲主義について論じたい。欲望を捨て、現世への執着を断ち切る禁欲主義は、神秘修行の一部であり、神秘階梯の一つに挙げられる。まず、序論でガザリーは、人間が持つ最も大きな悪は、様々な欲望の源である食欲であるとし、以下のように言う。⁽²¹⁾

食欲の次に、性欲が生じ、その次に金銭 (mal) と名誉 (yah) への強い願望が生じる。……金銭と名誉を十分に得ると、軽率、競争、嫉妬が生じる。そこから偽善の悪、高慢と傲慢の破滅が生じ、そこから恨み、妬み、敵意、嫌悪が生じ、そこからさらに、不法、不正、腐敗の破滅が生じる。これらはすべて、食欲に注意をしなかった結果であり、それから生じた満腹 (shab') による傲慢の結果である。もし人間が空腹 (ji) によって魂 (nafs) を謙虚にしていたら、魂は神に従い、悪魔への道は狭められ、傲慢と暴君性の道を歩まず、現世に夢中になることから断ち切られていただろう。⁽²²⁾

食欲と性欲は人間本来の二つの欲望であり、それらが次々と他の欲望を生み出し、人間の関心は現世に向き、来世から引き離されてしまう。人間の本性、つまり人間霊魂は霊的世界、来世に属するものであり、人間霊魂は本来その始源に戻ろうと願うものである。しかし人間は肉体を持ち、感覚的な世界、現世に生きているため、様々な欲望を持っており、人間の究極的関心は、本来の来世から現世へと移ってしまうのである。⁽²³⁾ それゆえ人間は、欲望、特に最も基本的な食欲を抑えなくてはならない。ガザリーは、空腹について以下のように言う。

空腹は、心の血液の量を減らし、その色を漂白し、漂白することによって心を光り輝かせる。そして（空腹は）、心の脂肪を溶かし、柔軟にする。その柔軟性が（神の）開示 (mukāshafah) の鍵である。心のかたくなさが、（神の開示を妨げる）ヴェールの原因であるように。心の血液の量が減れば、敵に通じる道が狭められるのである。⁽²⁴⁾

このように、空腹は心を柔軟にし、神に近づく修行において重要である。続いてガザリーは、第二章「空腹の恩恵と満腹の悪」において空腹の一〇の利点を述べている。⁽²⁵⁾ それによれば、空腹によって魂が浄められ、健康にな

り、時間を無駄にせずに神への崇拜 (ibādah) —— 礼拝などの身体による崇拜と、ズィクル (dhikr) などによる心による崇拜⁽²⁶⁾——に励むことができる。空腹は、心を浄めることであり、神に近づくために行うべき修行の一つであるとして、ガザリーは空腹を勧め、満腹を非難しているのである⁽²⁷⁾。

「一つの欲望の撲滅の書」の後半は性欲についてであり、そこでは、性欲に打ち勝つ者の利点が述べられている。この欲望は最も大きな影響を人間に及ぼし、それが生じると理性に最も反抗する。この欲望を必要としないことは、彼が守られていることを意味し、罪から遠ざける恩恵である⁽²⁸⁾。

このように、ガザリーは、食欲と性欲を抑えるべきであるとし、禁欲の意義を説いている。『宗教諸学の再興』第六番目の書「齋戒の内的意味の書 (Kitāb Aswār al-Saum)」によれば、齋戒(飲食、性行為を断つこと)の目的は、人間が天使の属性を獲得し、神に近づくことである。

齋戒の目的は、永遠なる神の性質 (akhlāq) を身につけることであり、可能な限り欲望を捨てて天使を模倣すること (iqtidā') である。というのは、天使は欲望を超越している (munazzah) からである。人間は、理性の光によって欲望を撲滅する能力のために、動物より上位の段階にあるが、天使より下位の段階にある。人間はこの欲望によって支配されており、それとの戦いに苦しんでいるからである。人間は欲望におぼれるたびに、最も低い被造物の域に沈み、動物の災難の域に達する。しかし、欲望を制御するたびに、最も高貴な被造物の域に上昇し、天使の域に達するのである。天使は神の側近くにあり (muqarrab)、天使を模倣し、その性質に倣う者は、天使と同じくらい、神の側近くにあるのである⁽²⁹⁾。

人間は欲望を持つゆえに、天使よりも下位にあるが、欲望を抑えることによって、神の側近くにある天使に近づ

くことができる。ガザリーによれば「神の側近くにある者」には三つの段階がある。まず神秘修行によって、神の名前 (ism)、属性 (sifah) の意味が開示される。そして、可能な限り神の属性を帯びることへの思慕 (shawq) が生じ、ついに、それらの属性のうち獲得可能なものを得ようと努力し、身につけ、人間は神のようになる (yasiru al-'abd rabbāni)'、つまり神に近づくのである。⁽³⁰⁾

以上のように、欲望を捨てることが、天使に近づき、そして神的属性を獲得して神に近づくための前提であるという点で、ガザリーは禁欲主義にも重要な意義があるとし、齋戒、禁欲の効用を説いている。しかしガザリーは、以下に述べるように、一部の徹底した禁欲主義者ではなく、欲望を抑えきれない普通の神秘主義修行者を対象とした議論をしている。

四 ガザリーにおける二つの欲望

ガザリーは、欲望を抑えなければならないとしながら、欲望の肯定的な力も認めている。禁欲よりむしろ、空腹と満腹の中間を勧めており、性欲も抑えられない場合は結婚して合法的性交を行うことにより、様々な利点が生じるとしているのである。

まず食欲について、「二つの欲望の撲滅の書」の第四章「様々な空腹の規則と利点」においてガザリーは、空腹の利点について先に述べたが、最も良いのは中庸 (wasat) であると言う。⁽³¹⁾ 食べる目的は、生命を維持し、神への崇拜の力を得ることである。食べすぎと空腹は、崇拜への障害であり、満腹でも飢えてもいないとき、崇拜が容易にできる。⁽³²⁾ 『宗教諸学の再興』第一一番目の書「食事作法の書 (Kitāb Adāb al-Akl)」の序論では、来世で神に

会うためには、知識と行為が必要であり、それらは健康な身体 (salamah al-badan) がなければ、不可能である⁽³³⁾ と言ひ、健康であることが見神の条件であるとする。ガザリーは禁欲的な空腹よりも、中庸の食事を勧めているのである。

「二つの欲望の撲滅の書」の第五章「食事を拒絶し、少量しか食べないことの偽善の害」では、食事を拒絶することには二つの害があると言う。①スーフィー初心者が名声のために隠れて食べるようになる。②食欲を抑えることに成功しても、それによって有名になることに喜ぶようになる。⁽³⁴⁾ ガザリーは、単に他人に誇示するために断食しても意味はないとし、無理のない中庸を勧めている。それが神への崇拜につながり、常に神を思念する生活を送ることができる。極端な禁欲主義者ではなく、普通の修行者が議論の対象となっているのである。

このようにガザリーによれば、食べすぎよりも、空腹のほうがよい。しかし、過度な禁欲（拒食、断食）も否定し、普通の量を食べるのがよいとして中庸を説いている。健康であることが、神への崇拜の力の条件であり、満腹でも空腹でもないとき、崇拜が容易にできるからである。

性欲については、「二つの欲望の撲滅の書」の後半（性欲に関する議論）の序論によると、性欲が人間を支配しているのは、二つの利点があるためである。

第一に、その快楽 (lathdhah) を知覚することによって、来世での快楽を類推することができる。というのは、火で焼かれる苦痛 (alam) が、身体的に最も強い苦痛であるのと同様に、性的快楽は、もしそれが続くならば、身体的に最も強い快楽だからである。促進力と抑止力 (al-tarhib wa-al-tarhib) は、人間を幸福へと導くが、それらは感覚的な知覚できる苦痛と快楽によってしかもたらされないのである。というのは、経験

ガザリーの修行論における性の問題

によって知覚できないものは、決して欲求されることはないからである。第二の利点は、子孫を残し、存在を存続させていくことである。これらが性欲の利点である。⁽³⁵⁾

このように性欲には、①性的快楽によって来世での快楽を類推することにより、来世での快楽のために努力する、②現世に子孫を残す、という利点がある。しかし、性欲には害もあり、性欲を制御できない場合、宗教においても現世においても破滅をもたらす。⁽³⁶⁾ 性欲には、大きな利点があるが、制御できなければ姦通などの罪を犯し、地獄に落ちることになる。よって性欲は、多すぎても少なすぎても非難され、中庸が称賛される。

次にガザリーは、「スーフィー初心者結婚すべきか否か」の章で、性欲を抑えられない者は、婚姻生活での合法的性交によって抑える必要がある、という議論を述べている。ガザリーによれば、初心者には、婚姻のことで魂を一杯にすべきではない。神ではなく妻への親しみを見出し、道を踏み外すことになるからである。神の使徒が何度も結婚したことに惑わされてはならない。⁽³⁷⁾ しかしガザリーは、以下のように、欲望がある場合は結婚したほうがいいと言う。

初心者には、最初は真知が確立するまでは、独身 ('uzbah) でいることが条件である。しかし、それは彼が欲望によって征服されていない場合だけである。もし彼が欲望によって征服されている場合、長時間の空腹と絶え間ない齋戒によって、それを撲滅する。しかしそれでも欲望を抑えられず、陰部 (farj) は守ることができても、視線 ('ayn) を守ることができない場合は、欲望を撲滅するために結婚したほうがいい。⁽³⁸⁾

ガザリーによれば、目による姦通 (zina) も大きな過ちであり、それは性的な姦通に導く。もし女性ではなく少年 (sibyan) から目をそらせない場合も結婚したほうがいい。欲望を持って少年の顔を見ることは禁じられて

いるからである。初心者は視線を下げて思考を制御できないから、結婚によって欲望を撲滅すべきである。⁽³⁹⁾ 欲望を弱めるためには、空腹、視線を下げる、他の活動に没頭する、の三つの方法があるが、この三つが有効でないなら、結婚するしかない。⁽⁴⁰⁾

このように、ガザリーによれば、視線を下げるなどして女性を見ないようにし、性欲を抑えられるならば独身でもいいが、性欲を抑えられず、姦通を犯す恐れがあるなら結婚すべきである。そして婚姻生活での合法的性交により、姦通を避けるだけではなく、快楽を得ることができる。性欲が満たされたときの喜びは、天国に約束された喜びを示している。ガザリーは、現世での性的快楽が天国でも続くように欲することにより、性的快楽は神への崇拜への原動力 (basis) となる⁽⁴¹⁾ と言う。

ガザリーは性欲と食欲を否定せず、神への崇拜の助けになる⁽⁴²⁾ としていることが分かった。次に両者を比較し、性欲の特徴を明らかにする。「二つの欲望の撲滅の書」の序論で、ガザリーは、食欲から始まる欲望の連鎖について述べていた。食欲と性欲は付随しており、性欲を抑えられなければ、次々と他の欲望が生じ、破滅に至ることになる。また食欲ではなく、女性を見ることによって性欲が生じ、姦通に至る場合もある。いずれにしても、性欲が害悪の大きな原因とされ、性欲は食欲以上に、非常に危険な欲望であるといえる。一方、性欲の利点も他の欲望に比べると大きい。つまり、性交によって、子孫を残すことができ、また性的快楽は、天国の快楽への励みになるのである。

たしかに食欲にも利点がある。適度な食欲による適量の食事は魂を謙虚にして浄め、性欲も鎮める。そして肉体的には健康になることにより、神への崇拜が容易になる。しかし食欲は生殖に関わるものではなく、子孫には無関

ガザリーの修行論における性の問題

係である。またガザリーは、満腹の快樂については触れていない。ガザリーは、様々な欲望の連鎖は、満腹により生じた傲慢の結果であるとしており、また、男性は満腹になると性欲を支配できなくなると言い、満腹は非難されている。⁽⁴²⁾天国での快樂を想像させるものは、性的快樂であり、満腹の快樂ではないのである。

以上、二つの欲望の議論を見てきた。ガザリーは欲望を抑圧する禁欲主義も認めていたが、同時に欲望を認め、特に性欲については重視していたことが明らかになった。天国での快樂を想像することによって、神への崇拜が容易になるからである。そのためガザリーは「婚姻作法の書」において、独身よりも結婚したほうが理想的なスーフィー的生活を送りやすいとしている。⁽⁴³⁾現世（現象界）から来世（不可視界）を類推し、天国の最高の報酬である見神を目指して、神への崇拜や神秘修行に励む、というガザリーの議論の思想的背景には、先に述べた彼の神秘主義的宇宙論があると考えられる。

ガザリーによれば、世界はムルク界とマクラート界の二つに分けられ、人間靈魂は、神秘修行によって二つの世界を上昇し、神との合一体験の中で神を見ることができると述べている。二つの世界には対応関係があること、人間靈魂は、来世での見神のために、神との合一を目指して上昇することが説かれている点において、ガザリーの神秘主義的宇宙論は、性的快樂の議論の前提になっている。

一方、マツキーの性の議論は、『心の糧』第四章「結婚と非婚どちらがよいか」に見られ、婚姻の三つの利点について説明されている。⁽⁴⁴⁾しかしその議論には、ガザリーの指摘した婚姻の利点、つまり性的快樂が天国への原動力になることについては述べられていない。むしろマツキーは、禁欲を重視し、独身を勧めている。マツキーによれば、神が課しているのは、心の平安、信仰の健全さ、魂の静けさであって、結婚するか否かは個人の状況によ

るのだが、マツキー自身は、このわれわれの時代には、独身によって得られる心の平安のほうがよいと言う⁽⁴⁵⁾。マツキーは、性の肯定的な力をガザリーほど重視しておらず、むしろ恐れているのである。しかもマツキーにおいては、宇宙論も断片的で発展していなかったため、ガザリーのような神秘主義的宇宙論に性を取り込んだ議論はできなかったのであろう。

五 イブン・アラビーの女性観

次に、イブン・アラビーの宇宙論、つまり存在一性論と結び付けて、性の問題、特に女性観に関する議論を検討し、ガザリーと比較したい。性の持つ力は、後のスーフィー、イブン・アラビーの思想でも重視されることになる。ガザリー以降、世界を神の自己顕現とするイブン・アラビーから始まる存在一性論が現れ、イスラーム神秘思想を代表する世界観となった。存在一性論は、神秘体験に基づいて世界を神の流出論的顕現と見るものである。

存在一性論を体系化した後世の思想家であるカーシャニー（‘Abd al-Razzāq al-Qāshānī, d. 1329）は、神とその顕現である世界を、以下のように五つの段階に分ける⁽⁴⁶⁾。①絶対的一性（ahadiyah）——一性の本質（dhat）、集一（jam’）そのものの顕現の場。②統合的一性（wahidiyah）——神名の統合の次元（ḥaḍrah）。③ジャバルト界——諸聖霊の開示、神の名前と属性の世界。④マラクート界——不可視界、霊と霊的なものの世界、象徴（mithal）の世界。⑤ムルク界——現象界、物質と物質的なものの世界。このように宇宙の階層には五段階があり⁽⁴⁷⁾、これらの諸段階を経て、神は現象界に自己顕現する⁽⁴⁸⁾。神と合一した頂点から人間が世界を見ると、世界は存在そのものである神の顕現として見えてくる。存在一性論は、神と世界の一体性を説く神秘主義的宇宙論なのであ

ガザリーの修行論における性の問題

る。

イブン・アラビーは、ガザリーと同様、性を重視しているが、思想的背景である宇宙論が異なっているため、それに伴うセクシュアリティの議論も変容した。『メッカ啓示 (*al-Futūḥāt al-Makkiyah*)』の第一章「我々の高位の父と低位の母の知識について」において、イブン・アラビーは神の自己顕現の過程を婚姻によって説明する。

高位の父たちのうち最初のもの（神）は自明なものであり、低位の母たちのうち最初ものは、可能的なまだ存在していないものである。最初の婚姻は、（在れ！ という）命令 (*amr*) の意図であり、最初の子（被造物）は、この（可能的な）もの自体の存在である。この父は、父性 (*ubuwwah*) に浸透しており (⁴⁹)、この母は、母性に浸透している。この婚姻は、すべてのものに浸透しており、この結果は永続する。

このように、最初の父である神と、最初の母であるまだ顕現していないものの宇宙的婚姻によって、神の自己顕現である被造物、つまり宇宙が生じる。同様に、人間は性的結合によって神の自己顕現を体験することができる。⁽⁵⁰⁾

子を生じさせる男女の結合は、すべての存在者を生じさせる神（父）と顕現する前の存在（母）との宇宙的結合を反映しているため、人間の性的結合は神の創造行為を模倣することになる。

しかし、イブン・アラビーにおいて、スーフィーにとって性行為の目的は、女性の中に神の聖霊を認め、神との一体性を悟ることである。⁽⁵¹⁾ イブン・アラビーの思想において、女性は重要な位置を占めており、女性は最も完全な神の顕現である。神は自分の姿に似せて人間（アードム）をお創りになったのであり、最も完全に、人間に自己顕現したのである。それゆえ、人間の中に神を見ることは、最も完全に神を見ることになる。それでは、神の完全な

自己顕現は、男性においてなのか、女性においてなのかという問題で、イブン・アラビーは後者だとする。というのは、女性は預言者に愛されているからであり、神以外に愛に値するものはないからである。⁽⁵³⁾

『叡智の台座 (*Fusus al-Hikam*)』の第二十七章には、イブン・アラビーの女性観について述べられている。男性は、女性の中に神を見ることによって、神を二つの側面から見ることができる。

男性が、女性の中に神（真実在）を見る（*shahada*）とき、（影響を受ける）受動者（*mufa'if*）の中に神を見ているのである。男性が、女性が彼自身から顕現したものとして、彼自身の中に神を見ると、彼は、能動者（*fa'if*）の中に神を見ているのである。男性が、彼自身から生まれたものに関心を持たずに、彼自身の中に神を見ると、仲介なしに（影響を受ける）受動者の中に神を見ているのである。だから女性の中に神を見ることは、最も完全で完璧である。というのは、彼は、神は能動者であり、受動者でもあるとして、神を見るからである。⁽⁵⁵⁾

まず①女性の中に神を見るということは、女性は神から顕現したものなので、神（女性）の受動的側面を見ることになる。②女性を顕現させたものとして自分自身の中に神を見るということについては、自分自身から女性が顕現したということは、自分は女性でもある。自分を見るということが、女性を見ることと重なり、自分は女性を顕現させたものなので、女性の中に神の能動的側面を見ることになる。③単に自分自身の中に神を見るということは、自分は神から顕現したものなので、神の受動的側面を見ることになる。

以上のように、女性を見るということは、神の能動的側面と受動的側面両方を見ることになる。イスラームにおいて神の九十九の名前が、威厳 (*jalat*) と美しさ (*jamal*) の二つの分類に分けられるように、神は正反対の二つ

の側面を持っている。それゆえ、両方の側面を持つものとして、女性の中に神が完全に顕現しているのである。⁽⁵⁶⁾ 女性性は神の完全な顕現と捉えられている。神と世界は一体であり、性の神秘的意味は、神（女性）と世界（男性）の結合の一体感を感じることである。性的結合により、神と世界との一体感を会得することが、イブン・アラビーにおける性の大きな意義である。

六 結論

以上の議論を踏まえ、マツキーからガザリー、さらにイブン・アラビーへと変容していくスーフィズムの思想史の流れの中にガザリーを位置付け、ガザリーの神秘主義的宇宙論とセクシュアリティの結びついた議論の独自性を明らかにする。

まず、マツキーの宇宙論においては、世界はジャバルト界、マラクト界、ムルク界に分けられるとし、神秘主義的宇宙論の萌芽がみられるものの、断片的な記述しか見られなかった。また性の議論は少なく、このわれわれの時代には、独身によって得られる心の平安のほうがよいという立場である。マツキーは、性の力を神への崇拜へ生かしていくよりは、むしろ禁欲的に性欲を抑えていく方向だった。

ガザリーは、マツキーの宇宙論を体系化した。そしてムルク界とマラクト界との対応関係を説き、人間靈魂が二つの世界を上昇し、神との合一に至るとした。性の問題に関しては、食欲と性欲を抑制していく禁欲主義も認めているが、欲望を抑えられない一般の修行者を視野に入れ、中庸を説き、欲望を信仰の原動力とする方向に変容した。ガザリーは、性欲を食欲よりも重視しており、性の持つ肯定的な力を認めた。そして性に対する考え方と

神秘主義的宇宙論が一体となった結果、ガザリーは、現世での性的快楽が来世での快楽——究極的には見神——を類推させ、性欲は、神秘修行を中心とする神への崇拜に励む原動力になる、という思想を理論化することができたのである。

一方、イブン・アラビーの宇宙論は、存在一性論という神と世界を一体として見るものである。存在一性論を思想的背景に持つイブン・アラビーの場合は、ガザリーとは異なる性の議論を展開した。存在一性論に性の議論を取り入れて、男女の結合が神の創造行為と重なり、また女性は完全な神の顕現であり、女性との一体性が神との一体性と重なるとする。性的結合を、神と世界（人間）との一体性と解釈したのである。

イブン・アラビーの存在一性論は、神との合一の境地における、神と神の自己顕現である世界との一体性を説く宇宙論である。この存在一性論の特徴が、性の問題においても反映されており、イブン・アラビーにおいては、神と世界の一体性と重なる男女の結合、一体性が重視されている。それとは異なり、ガザリーの神秘主義的宇宙論は、人間靈魂が神秘修行によって、現象界、不可視界を超えて神へ上昇していくという宇宙論である。⁽⁵⁷⁾ そのため、性の問題では、人間靈魂が神との合一を目指して上昇していくための原動力として、性的快楽が重視されているのである。ガザリーは、性の肯定的な力を取り入れ、自らの神秘主義的宇宙論に適合する形の修行論を展開しているといえよう。

ガザリーの死後、一二世紀半ば以降、タリーカ (ṭarīqah スーフィー教団) が組織され、スーフィズムは、インド、東南アジアなどにも広がっていった。思想的には、しだいにガザリーの修行論を中心とする議論に、イブン・アラビーの存在一性論が加わり、存在一性論はスーフィズムを代表する思想となった。⁽⁵⁸⁾ 後世のイスラーム世

界における神秘主義的存在論や、神秘主義詩に大きな影響を持ったのは、ガザリーを中心とする実践的な修行論ではなく、哲学的な存在一性論である。しかしながら、広域的なスーフィズムの思想史において、ガザリーの性の議論は、非日常的・形而上的なイブン・アラビの議論とは異なる意義を有している。人間霊魂の上昇を重視した宇宙論に基づき、性の力を取り入れ、修行に励みながら生活する、というガザリーの思想は、後世のスーフィーが修行を実践しながら日常生活を営む基礎となったのである。

略号

- Iḥyā'* al-Ghazālī, *Iḥyā' 'Ulūm al-Dīn*, ed. by Abū Ḥafṣ, 5 vols., Cairo: Dār al-Hadīth, 1992.
Mishkāt al-Ghazālī, *Mishkāt al-Anwār*, ed. by A. 'Affīf, Cairo, 1964.
Qūt al-Makkī, *Qūt al-Qulūb*, 2 vols. in 1, n.p., n.d.

注

- (1) 拙著『現代に生きるイスラームの婚姻論——ガザリーの「婚姻作法の書」訳注・解説』*Studia Culturae Islamicae* no. 73, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、二〇〇三年参照。
- (2) 翻訳は T. J. Winter (trans.), *Al-Ghazālī on Disciplining the Soul and on Breaking the Two Desires*, Cambridge, 1995 がある。
- (3) 修行論、禁欲主義における欲望については、中村廣治郎『ガザリーの祈禱論——イスラーム神秘主義における修行』大明堂、一九八二年、五七—六七頁。K. Nakamura, *Ghazali and Prayer* (Kuala Lumpur, 2001), pp. 41-51 参照。
- (4) R. W. J. Austin, "The Feminine Dimensions in Ibn 'Arabi's Thought," *Journal of the Muhyiddin Ibn 'Arabi Society*, 2, 1984, pp. 5-14; idem, "Meditations on the Vocabulary of Love and Union in Ibn 'Arabi's Thought," *Journal of the Muhyiddin Ibn 'Arabi Society*, 3, 1984, pp. 6-19. 本稿の「イブン・アラビの女性観」参照。
- (5) 拙稿「ガザリーの婚姻論——スーフィズムの視点から」(『オリエント』第四七巻第二号、二〇〇五年)、二二〇—二三五頁。

idem, "Al-Ghazālī and Marriage from the Viewpoint of Sufism," *Orient*, 40, 2005, pp. 124-139 参照。

- (6) マッキーの『心の糧』は、ガザリーの『宗教諸学の再興』に大きな影響を与えている。『心の糧』には食事の作法の章(第四〇章)は存在するが(*Qūt*, Vol. 2, pp. 178-192; Richard Gramlich, *Die Nahrung der Herzen: Abu Ṭālib al-Makkī's Qūt al-qulūb eingeleitet, übersetzt und kommentiert*, 4 vols. (Stuttgart, 1992-1995), Vol. 4, pp. 310-390) '食欲と性欲に関する章は存在しない'。

- (7) L. Gardet, "Ālam," H. A. R. Gibb et al. (eds.), *The Encyclopaedia of Islam*, New Edition, 11 vols., Leiden, 1960-2002 (*ET*), Vol. 1, p. 350 参照。

- (8) 照明学 (ishraq) の師、スフラワルディー (al-Suhrawardī, d. 1191) はもと、世界はジャバルト界、マラクト界、想像世界 ('alam al-mithal) 'ムルク界という四つの層に分けられる(中村廣治郎『イスラムの宗教思想——ガザリーとその周辺』岩波書店、二〇〇一年、一七—一八頁)。

- (9) *Qūt*, Vol. 1, p. 235.

- (10) *Qūt*, Vol. 1, p. 245; A. J. Wensinck, "On the Relation between Ghazālī's Cosmology and His Mysticism," *Mededeelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen, Afdeling Letterkunde*, Ser. A, 75 (Amsterdam, 1933), pp. 191-192.

- (11) *Mishkāt*, p. 65. または、ムルク界とマラクト界の中間界であるジャバルト界を加えた三つに分けられる (al-Ghazālī, *Kitāb al-Imlā'*, in *Iḥyā'*, Vol. 5, p. 258)。³ ジャバルト界については、ムルク界とマラクト界との対応という議論に関係しないため、ここでは触れずに済ませる。K. Nakamura, "Imām Ghazālī's Cosmology Reconsidered with Special Reference to the Concept of *Jabarūt*," *Sutudīa Islamica*, 80, 1994, pp. 29-46 を参照せよ。

- (12) al-Ghazālī, *Jawāhir al-Qur'ān* (Beirut, 1981), p. 11.

- (13) *Mishkāt*, p. 67. ガザリーのマラクト界、人間靈魂における哲学の影響については、拙著『イスラムの世界観——ガザリーとフーブスター』明石書店、二〇〇五年、一四四—一四七頁参照。

- (14) *Mishkāt*, p. 50.

- (15) *Mishkāt*, p. 67.

- (16) *Mishkāt*, p. 66.

- (17) *Mishkāt*, pp. 60-61.

- (18) al-Ghazālī, *al-Maṣṣad al-Asnā fī Sharḥ Ma'āni Asmā' Allāh al-Ḥusnā*, ed. by F. Shehadi (Beirut, 1982), p. 58.

ガザリーの修行論における性の問題

- (19) *Iḥyāʾ*, Vol. 4, p. 480.
- (20) ガザリーは、現世で神を見たことがなければ、来世で神を見ることはできないと言う (*Iḥyāʾ*, Vol. 4, p. 480)。
- (21) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, p. 128.
- (22) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, pp. 128-129. ガザリーの『四〇の書 (*Kitāb al-Arbaʿin*)』でも欲望の連鎖について述べられている。al-Ghazālī, *Kitāb al-Arbaʿin* (Beirut, 1988), p. 78 参照。
- (23) 中村『ガザリーの祈禱論』、五八―六〇頁参照。
- (24) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, p. 122.
- (25) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, pp. 134-142 参照。なおガザリーは、この書の第一章「空腹の利点と満腹の非難」では、空腹を勧めるハディースを列挙し、第三章「食欲を撲滅するための実践的方法」では、食欲の抑え方について述べ、合法的な食事を摂取し、食事の量を徐々に減らしていくとしている。
- (26) 神への崇拜は、礼拝、メッカ巡礼、さらに結婚している場合は、家族を養うこと、子供を手に入れようと努力することなどの身体的な行為によるものと、知識、瞑想などの内的な方法によるものがある。 *Iḥyāʾ*, Vol. 2, p. 57 (*Kitāb Adab al-Nikāh*) 参照。
- (27) 食事の作法については、ガザリー以前のスーフィーたちによって論じられてきた。たとえばサッラージュ (al-Sarrāj, d. 988) は、一般に大食を否定し、小食を勧め、スナナを守って食べるとする。 al-Sarrāj, *Kitāb al-Lumaʾ*, ed. by R. A. Nicholson (London, 1914), pp. 183-185. 鎌田繁「サッラージュによるスーフィーの理想的生活について」(『日本オリエント学会創立二五周年記念オリエント学論集』刀水書房、一九七九年)、一八八頁参照。ガザリーは、以前のスーフィーの議論を詳細に説明し、実践的な方向に押し進めていったのである。なお、イスラームの食については G. J. H. van Gelder, "Taʿām," *ET*, Vol. 10, pp. 4-5 参照。
- (28) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, p. 167.
- (29) *Iḥyāʾ*, Vol. 1, p. 368 (*Kitāb Asrār al-Saum*). 中村『ガザリーの祈禱論』、七一頁、註二三。
- (30) al-Ghazālī, *al-Maṣad al-Asnāʾ*, pp. 43-44. ただし、このように神の属性を獲得したとしても、ガザリーは神と人間との類似はまったく認めていない。
- (31) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, p. 154.
- (32) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, p. 154.
- (33) 「食事作法の書」は、正しい食事の作法について述べたもので、特に食欲の神秘主義的意義などについては書かれていない。

スーフィー的生活の基本としての、守るべき規則が確認されている。この書の翻訳は、D. Johnson-Davies (trans.), *Al-Ghazālī on the Manners Relating to Eating*, Cambridge, 2000 がある。なお、食事のときのズイクルとドゥアーについては、中村『ガザリーの祈禱論』一七七一―一八頁参照。

- (34) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, pp. 158-159.
- (35) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, p. 159.
- (36) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, p. 159.
- (37) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, p. 162. ガザリーによると、神の使徒は多くの妻を持っていたが、神への崇拜のために一人でいることができたのであり、欲望を満足させることはその妨げにならなかったのである。*Iḥyāʾ*, Vol. 2, p. 57 参照。
- (38) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, p. 163. 「婚姻作法の書」でも、欲望があり、姦通の恐れがある限り、たとえ非合法な手段で家族を養うことになるとしても、結婚した方がよいとする (*Iḥyāʾ*, Vol. 2, p. 56)。
- (39) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, p. 164.
- (40) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, p. 166.
- (41) *Iḥyāʾ*, Vol. 2, p. 45. 拙著『現代に生きるイスラームの婚姻論』、五四頁。「婚姻作法の書」では、性的快楽についてより詳しく述べられている。*Iḥyāʾ*, Vol. 2, p. 45 参照。
- (42) *Iḥyāʾ*, Vol. 3, p. 138.
- (43) ガザリーとマッキの婚姻論の比較については、拙稿「ガザリーの婚姻論」参照。
- (44) 妻とたわむれることにより、夫から善行 (ḥasanat) が多く生じ、子供を手に入れることができ、性交の際に神の名前を唱えることになる。*Qūt*, Vol. 2, p. 243 参照。
- (45) *Qūt*, Vol. 2, p. 259.
- (46) al-Qāshānī, *Isṭilāḥāt al-Sūfiyyah* in D. Pendlebury (ed.), *A Glossary of Sufi Technical Terms* (London, 1991), pp. 51-52, 89. 東長靖「存在一性論学派の顕現説における「アッラー」の位階——カーシャーニーとジーリーを中心として」(『オリエンツ』第二九巻第一号、一九八六年)、五〇―五二頁参照。カーシャーニーは、『叡智の台座注釈 (Sharḥ Fuṣūṣ al-Hikam)』でも五つに分類している。T. Izutsu, *Sufism and Taoism: A Comparative Study of Key Philosophical Concepts* (Berkeley: University of California Press, 1983), p. 11 参照。
- (47) ジーリー (ʿAbd al-Karīm al-Jīlī, d. ca. 1428) は、『完全人間 (al-Insān al-Kāmil)』において、顕現の段階を六つに分類して

- る。° al-Jīlī, *al-Insān al-Kāmil*, 2 vols. in 1 (Cairo, 1981), Vol. 1, pp. 37-38. 東長「存在一性論学派の顕現説における「アッラー」の位階」五四一五六頁参照。
- (48) この段階の中で「ジャバルト界とマラクト界が霊的世界である。カーシャーニーはジャバルト界を純粋な諸霊 (arwāḥ muḥarradah) の段階「マラクト界を行為の諸靈魂 (nufus āmīyah) の段階であり、象徴の世界とする (al-Qāshānī, *Istīlāḥāt al-Sūfiyah*, p. 57)°。
- (49) Ibn al-'Arabī, *al-Futūḥāt al-Makkiyah*, 4 vols. (Beirut: Dār Ṣādir, n.d.), Vol. 1, p. 139; S. Murata, *The Tao of Islam: A Sourcebook on Gender Relationship in Islamic Thought* (Albany, 1992), p. 148. またイブン・アブユーザ「諸霊 (父) と四元素 (母) の婚姻によつて」神は世界を存在させたといふ説明も同じである。° Ibn al-'Arabī, *al-Futūḥāt al-Makkiyah*, Vol. 1, p. 138 参照。
- (50) Murata, *The Tao of Islam*, p. 186.
- (51) V. J. Hoffman, *Sufism, Mystics, and Saints in Modern Egypt* (Columbia, S.C., 1995), pp. 235-238.
- (52) 「神の似姿としての人間」に関するイブン・アラビーを含むスーフィーたちの議論については M. Takeshita, *Ibn 'Arabī's Theory of Perfect Man and Its Place in the Islamic Thought*, Studia Culturae Islamicae no. 32 (Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 1987), pp. 15-73 参照。
- (53) 「この世で私に愛されているものは、女性、香水、礼拝のときの喜びである」という預言者ムハンマズのハディースがある。° al-Nasā'ī, *Sunan*, 'ishrah al-nisā'-1 (no. 3878), *Hadith Encyclopedia*, CD-ROM, Version 2.1, Cairo: Harf 参照。イブン・アブユーザのハディースを引用して議論している。° Ibn al-'Arabī, *Fuṣūṣ al-Hikam*, 2 vols. in 1 (Beirut: Dār al-Kitāb al-'Arabī, 1980), Vol. 1, pp. 214, 215 参照。
- (54) Murata, *The Tao of Islam*, p. 192.
- (55) Ibn al-'Arabī, *Fuṣūṣ al-Hikam*, Vol. 1, p. 217; R. W. J. Austin (trans.), *The Bezels of Wisdom* (New York, 1980), p. 275.
- (56) 女性の中に神を見ることによつて「男性は、威厳と美しさ、距離と近さ、能動性と受動性、左と右などの両面を持つものとして、神を陰と陽両方から見ることが出来る (Murata, *The Tao of Islam*, p. 192)°。女性には神のイメージが投影されており、男性が神の自己顕現である自己の本質を理解する際には「自分自身よりも」女性について瞑想したほうがよい (J. Elias, "Female and Feminine in Islamic Mysticism," *The Muslim World*, 78, 1988, p. 217)°。なお「スーフィーの愛が、女性ではなく男性に向かった場合」つまり少年への愛の理論については A. Schimmel, "Eros—Heavenly and Not So Heavenly—in Sufi Literature

and Life," in A. L. al-Sayyid-Marsot (ed.), *Society and the Sexes in Medieval Islam* (Malibu, 1979), pp. 130-133 参照。

- (57) ガザリーの記述は、存在論的であるよりは、むしろ体験的である。ガザリーの関心は神に向かつての人間の前進の過程であって、到達した時点からの記述、つまり神的下降・一者の流出論的顕現ではなかったということである（中村『イスラムの宗教思想』一二二頁）。

- (58) たとえばインドでは、一二世紀末から一三世紀初頭以降、本格的なスーフィズムの流入が始まった（A. Schimmel, *Mystical Dimensions of Islam* (Chapel Hill, 1975), p. 345）。一四世紀までは古典的なスーフィーの著作が継続的に読まれていたが、まもなくイブン・アラビーの著作に対して多くの注釈書が書かれ、存在一性論が普及した。さらに一五世紀末以降は、存在一性論を詩的に表現した神秘主義詩によって、存在一性論の概念は、スーフィーの理論書を読まない多くの人々にまで影響力を持つようになった（*ibid.*, p. 357）。なお、チシュティー教団、スフラワルデー教団などが影響力を持ったインドのスーフィズムについては *ibid.*, pp. 344-402 参照。性の議論に関するスーフィズムとヒンドゥー教の相互の影響については、今後の課題である。